

■ ドル/円の新たな強気相場のスタートは？

昨日（12/13）のNY時間帯に「米税制改革法案で上下両院共和党が暫定合意した」との報が伝わってきた。それを好感した米株価は堅調に推移することとなり、NYダウ平均に至っては5日続伸し、4日連続で史上最高値を更新した。

それは、同日行われた米連邦公開市場委員会（FOMC）の結果が事前に市場予想にさして違わないものであったにも拘らず、市場が「米連邦準備理事会（FRB）の慎重姿勢は2018年も引きつがれる」とあらためて認識したことにも因る。結果、一方で米10年債利回りは低下し、ドルはあらためて売り込まれた。

ここ数日、ドル/円は一目均衡表の日足「雲」上限を試す展開を続けていたが、昨日はあえなく同水準に押し戻される格好となった。FOMCの内容・結果は、参加メンバーらによる2018年の経済成長見通しが9月時点より大幅に上方修正されるなど、むしろ事前予想よりもやや強めだった部分もある。それにも拘らず、FOMC後にやけに強くドルが売られたのは、とりあえずのイベント通過、とりあえずの材料出尽くしということか。

少々解せないところもあり、かつまたドル/円の下値が今のところ21日線付近で下支えされる格好にもなっていることから、個人的には目先ある程度の揺り戻しの動きも見られると踏んでいる。ただ、下図でも確認できるようなトライアングルの上辺（＝2015年6月高値と2016年12月高値を結ぶ直線＝レジスタンスライン）を上抜けるような展開となっていくには、今少しの時間を要することとなりそうである。



少し長い目では、このトライアングルを上放れしてはじめて2015年6月高値からの調整局面が終了したとの感触が得られることとなるわけで、それは次なる新たな強気相場のスタートにもなり得ると見られる。

ちなみに、ドル/円の直近高値である114.73円（11/6）も前記のレジスタンスラインに見事に頭を押さえられたような格好となっている。今後、この114.73円をもクリアに上抜けるような展開となれば、そこからドル/円の上値余地は一気に大きく広がることとなろう。

もちろん、対ユーロでもドルが強気で推移するに越したことはなく、その行方はやはりECBの政策方針が重要なカギを握る。一部報道では、ECB内部で早期出口論への支持が強まっているとされているが、あくまでドラギ総裁は今後もそうした見方を封じ込めようとすると個人的には見る。そのたびに、10月のECB理事会後のように市場で失望の反応が見られる可能性について一応は警戒しておく必要があると考える。

（12月14日 11:15）